

『篁物語』の成立と篁伝承の展開

－小野篁の実像と虚構をめぐって－

仁 藤 智 子

【キーワード】 小野篁 『篁物語』 『本朝文粹』 『江談抄』 西山本 (承空本)

はじめに

本共同研究において、筆者は歴史学の立場から、(1) 小野篁の実像やその生きた時代背景、また (2) 『篁物語』が成立した時代背景、(3) 『篁物語』が伝来してきた過程について明らかにすることを課題としてきた。ここに改めて、九年に及ぶ研究成果を一覧することを許していただきたい。

- A 「二人の東宮恒貞・道康と東宮学士小野篁－歴史書から見た小野篁」
- B 「平安貴族の社寺参詣のの様相－『篁物語』における稲荷詣をめぐって」
- C 「歌僧・承空の基礎的考察－『篁物語』書写の歴史的背景」
- D 「小野篁関係史料集成－正史編」
- E 「西山本 (承空本を含む) の基礎的考察－花押と奥書から見た筆写活動」
- F 「承空本 (西山本) 『小野篁集』紙背文書に関する覚書－鎌倉末期における西山往生院と室町「周辺」」
- G 「中世藤原家における歌書の伝来と西山本 (承空本を含む)－御子左家の分裂と歌書群の伝来過程」
- H 「史実と物語のあいだ－平安時代における文芸創作の空間としての『篁物語』と『伴大納言絵巻』」
- I 「平安時代の稲荷神」

これらは、

- ・モチーフとなった実在の人物である小野篁に関連するもの (A・D) ← (1)
- ・『篁物語』の舞台となった時代背景および『篁物語』の成立過程に関連するもの (B・H・I) ← (2)
- ・『篁物語』の現存最古の写本とされる西山本 (承空本) に関連するもの (C・E・F・G) ← (3)

に3分類することができ、それぞれ、上述した課題の (1)・(2)・(3) に対応している。

小稿では、これまでの研究成果を振り返りつつ、『篁物語』の成立とその後の篁伝承の展開を考えるために、小野篁を歌物語の主人公にすることの意義を再度検討していきたい。なお、西山本に関しては、紙幅の都合で別の機会に論ずることにする。

一 実在の人物としての小野篁とその時代

『篁物語』は、大学寮の学生であった小野篁が異母妹の漢籍の教授をするところから始まる。やがて、「角筆」という方法を用いて、思いの丈を語り合う仲となる。漢籍の教授や角筆が小道具として使用されるところから、大学寮の学生が主人公にはふさわしかったのであろう。また、第二部では、右大臣の娘への求婚譚において、彼の作った求婚書のすばらしさに右大臣が娘との婚姻を許す。すでに指摘しているように、この物語の主人公は、第一部・第二部を通じて、漢籍に通じた「学識」の誉れ高いと評される人物でなければならず、平安期を代表する文人の中から小野篁が選ばれたと考えられる。

大学寮の学生という点では、篁は弘仁12(822)年に文書生試に及第しており、勅撰漢詩集である『経国集』には、その時の答案として伝えられる詩賦が残っている。課題は、「隴頭秋月明」を六十字で韻を踏んで賦することであった。

奉試、賦得「隴頭秋月明」 題中取韻限六十字

反覆单于性 辺城未解兵 戍夫朝暮食 戎馬曉寒鳴
帶水城門冷 添風角韻清 隴頭一孤月 萬物影云生
色満都護道 光流依飛營 辺機候侵寇 応驚此夜明

(*太字は韻、筆者による)

試を奉じて、賦して「隴頭 秋 月明」を得たり 題中韻を取りて六十字を限る

反覆するは单于の性なれば、辺城は未だ兵を解かず。

戍夫は朝の暮に食ひ、戎馬は曉の寒さに鳴く。

水を帯びて城門は冷へ、風に添へて角韻は清し。

隴頭には一つ孤月のみありて、万物の影は云に生まる。

色は都護の道に満ち、光は依飛の營に流る。

辺機は侵寇に候ふも、応に此の夜の明らかなるに驚くべし。³

この詩賦では、秋の月を愛でる暇もない匈奴との前線にある城塞の緊張した様相が、六十字という限られた字数の中で、韻を踏んで綴られている。篁は、題名の「明」を韻として、偶数句の太字で示した文字で「兵・鳴・清・生・營・明」と韻を踏む。題材は匈奴との前線にある中国の城塞であるが、父である岑守が陸奥守として赴任した陸奥国で、篁は幼少期を過ごしている⁴ことを考慮すれば、そ

の育った東北の城柵と中国の東北地域の城塞をかけていると解することができる。この時期には一応の落着をみた、古代日本の国家事業としての東北経営の様相が、その背景となっている。この詩賦からは、若い篁の漢詩文に対する優れた才能や、その時の政局に対する鋭い観察眼が感じられる。後年に、篁は遣唐副使にもかかわらず、乗船を拒否して隠岐へ配流となった。その際にも、「西道謡」を作って遣唐使事業を批判し、嵯峨上皇の怒りを買っている⁵。その詩文は伝わらないが、状況から国家政策に対する的確な批判であったと推測することができる。

篁が及第した大学寮は、式部省の管轄下にあり、官吏になるために学問を志す青年が学んでいた。令制では経学と算学の二部門であった⁶が、その後の改革で、平安初期には、明経道（博士、助教、直講、明経生）、明法道（博士、明法生）、文章（紀伝）道（博士、文章生）、算道（博士、算生）のほか、音博士と書博士がおかれるようになっていた。また、当該期には諸氏族によって官吏養成のための教育機関である大学別曹が作られるようになるため、大学寮の地位は相対的に低下していくとされる。大学寮四道のなかで、中国の史書や漢籍を学ぶ紀伝（文章）道が、突出して重用されるようになる。別曹を持たない小野氏から出た篁は、この大学寮ルートをたどって官吏として立身していくほかなかったのである⁸。

篁の高い学識と指導力が、当時の社会で評価されていたことは、二人の東宮一淳和皇子の恒貞親王と仁明皇子道康親王（のちの文徳天皇）一の学士を拜命していることから明らかである。最初に学士として仕えた恒貞親王は、842年の承和の変によって廃太子され、出家して仏道に従事するようになった⁹。このとき恒貞に代わって皇太子となったのが、従兄弟に当たる道康親王である。恒貞の生母である淳和皇太后・正子内親王は、仁明天皇と双子であったと考えられ、ともに嵯峨上皇と太皇太后橘嘉智子の実子である¹⁰。篁登用の背後には、嵯峨の侍読や橘嘉智子の皇后宮大夫を務めて、両者からの信頼の厚かった父の小野岑守があった¹¹ことが想像できる。岑守も漢詩文に優れ、多くの作品を残している。小野篁の漢詩文に対する才能や学識の誉れが、歌物語である『篁物語』の主人公像へと結びついたことは容易に推測できる。

『文徳実録』仁寿二（852）年十二月癸未条に、小野篁は五十一歳の生涯を閉じたと記されている。その薨伝によれば、小野篁は文人であっただけではなく、法隆寺僧善愷の訴訟事件など困難な政局を乗り越えてきた不撓不屈な政治家でもある¹²。享年からすると、彼は延暦二十一（802）年頃の生まれであったことになり、桓武朝の末年から、平城・嵯峨・淳和・仁明・文徳の時代を生きることになる。特に官人と出仕するようになった嵯峨朝の後半から文徳朝は、複数の王統の並立による混乱が収斂されていく時期にあたり、篁に大きな影響を与えた嵯峨とその男系の直系である仁明・文徳王統が確立する。この時期の「文章経国」を志向する風潮のなかで、学識と見識をもって仕えた有能な官人たちを「良吏」と呼ぶ。

篁は、その「良吏」の一人であったことになるが、当該期には、彼と同等又はそれ以上の官人たちは複数存在しており、篁が特筆される存在であったわけではない。では、なぜ篁であったのか。『本朝文粹』に収録された篁の求婚書が大きく影響したことは否めないであろう。これについては、章を改めてみることにする。

小野篁の姉妹について、付言しておきたい。岑守の子として、『尊卑文脈』には、篁のほかに女子が伝わる。この女子は、藤原南家出身の藤原敏行の室になっている。藤原敏行（～901あるいは907年）は、清和朝から醍醐朝に活躍した官人で、書家や歌人（のちの三十六歌仙の一人）としても名高い。書をよくした篁の流れをひくといわれる敏行の書跡も残る¹³。敏行の年齢から言っても、その室となったとされる女子は、830年に没した岑守の晩年の娘と考えられるが、『篁物語』の異母妹とは別人物であろう。敏行の室として、ほかに、紀有常の女子、紀全吉の女子、藤原伊衡を生んだ多治比弟梶の女子などが知られている。

篁については、近年、繁田信一『小野篁－その生涯と伝説』¹⁴が公刊されたので、参照されたい。

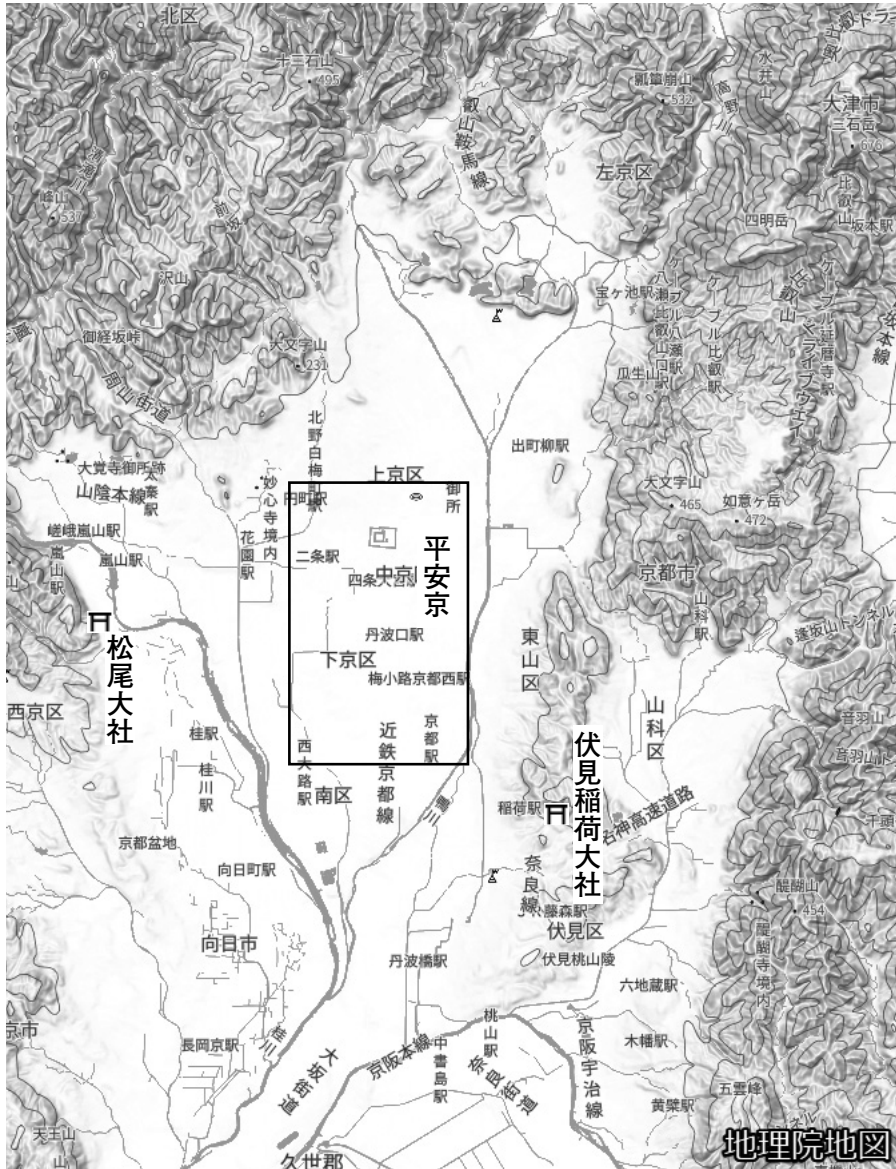
二 『篁物語』の成立過程

これまでの共同研究の研究成果によって、『篁物語』の成立時期は、11世紀後半から12世紀末に絞られてきた。『篁物語の』第一部と第二部の構成や分量の違いや落ち着きのなさから、それぞれの部分の成立が異なる可能性がある。

第一部前半は、大学寮の学生であった篁と、漢籍の素養を身に付けさせようとした異母妹との出会いや恋の芽生えが描かれる。後半は、稲荷詣でという非日常空間での接触、さらに秘めた関係が親の知るところとなり、隔離された異母妹が衰弱死するという形で終わるところまでである。

第一部の後半の舞台となった稲荷詣に着目すると、平安期に人々を魅了した社寺参詣のなかで「稲荷詣」が選ばれたこととその時代性について検討することが、作品の成立年代を考える一つの鍵になると思われる。すでに考察したように、稲荷神は9世紀前半の淳和朝に突然史料に現れて、平安京の南東にある社として国家による奉幣の対象となり¹⁵、次第に存在感を持つようになる。元々この稲荷神は、山城国愛宕郡を開拓した秦氏の農耕信仰をその基盤とするとされる。山城国の秦氏といえば、太秦の広隆寺や洛西の松尾神で知られる渡来系の氏族である¹⁶。【地図】を参照していただきたい。平安京の南西の松尾社は「水と酒」、南東の稲荷社は「稲」を祀る社で、いずれも秦氏に関連する。

10世紀以降、稲荷神は摂関家である藤原師通の崇拜を受けるようになり、やがて平安京周辺にある有力な神社の一つとして、国家祭祀の対象となっていく¹⁷。11世紀には、広く都市民の崇拜を受けるようになる。このような背景をもって、11世紀には稲荷詣が盛行し、都市民の祭礼として「稲荷祭」が執り行われるよ



うになる。¹⁸このような歴史的背景を考慮するならば、『篁物語』の稲荷詣に関わる第一部後半の成立時期は、早くても11世紀以降とすることができる。¹⁹すでに指摘されている『今昔物語集』に見える稲荷詣での類話との関係を加味するならば、さらに時代は降ることになる。

第二部は、異母妹の死から立ち直ったかのように見える篁が、右大臣に、その娘との婚姻を許してほしいと求婚書を差し出す。右大臣は篁の見識に驚き、娘たちに婚姻を勧めるが、ただ一人承諾した中の君とめでたく契りを結ぶ。その後、

異母妹の霊が現れて篁をなじる。悩みに沈む篁を室となった中の君は容認するところまで。

第二部のモチーフとなる篁の求婚書は実在する。『本朝文粹』は、次のように収録する。

奉 右大臣 藤原三守 野相公

学生小野篁誠惶誠恐謹言。

竊以、仁山受塵、滔漢之勢寔峙、智水容露、浴日之潤良流。

是以尼父結好於縹紲之生、呂公附嬪於駟亭之士。

剛柔之位、不可得失、配偶之道、其来尚矣。

伝承賢第十二娘、四徳無双、六行不闕。

所謂君子之好仇、良人之高媛者也。

篁才非馬卿、彈琴未能、身非鳳史、吹簫猶拙。

独対寒窓、恨日月之易過、孤臥冷席、歎長夜之不曙。

幸願蒙 府君之恩許、共同穴偕老之義。

不堪宵蛾弘燭之迷、敢切朝藿向曦之務。

篁誠惶誠恐謹言。

年月日

右大臣に奉る 藤原三守

野相公

學生小野篁，誠惶誠恐して謹んで言す。

竊ひそかに以おもへば、仁山じんざんは塵じんを受けて、滔漢とうかん之勢いきおい寔まこと峙そばだてり。智水ちすいは露いを容ゆるれて、浴日よくじつ之潤うるおい、良まことに流もれたり。是こゝを以もつて、尼父じほは好よしみを縹紲るいせい之生のしょうに結りよび、呂公りよこうは嬪むすめを駟亭えきてい之士のしに附つく。剛柔こうじゅう之位のくらいは、得えて失うふべからず。配偶はいぐう之道のみちは、其こゝの来きたるは尚なほし。傳つたへ承うけたまわる賢けん第十二娘のむすめ、四徳しとく無双むさう、六行りくかう不闕ふけつ。所謂すゐ、君子くんし之好このよき仇あひ、良人りやうじん之高たかき媛めいなり。篁ひ、才さいは馬卿ばけいにあらざれば、琴こを彈ひくに未なだ能あたはず。身みは鳳史ほうしにあらざれば、簫しょうを吹ふくに猶なほほ拙つたなし。獨ひとりり寒ひやき窓まどに對むかひて、日月にちげつ之過やぎ易やすきを恨にくみ、孤ひとり臥ふ冷ひやたき席まくらに臥ふして、長夜ちやうや之曙あけげざるを歎なげく。幸こゝひ願ねがはくば、府君ふくんの之恩おん許きよを蒙こうむりて、同穴どうけつ偕老かいらう之義のぎを共ともにせん。宵蛾せうがの燭がを拂はらふ迷まよひに堪たえず。敢あさて朝藿あさかく之曦ひに向むかふ務つとむを切きたり。篁ひ、誠惶誠恐せいこうせいきょうして謹まうんで言いふ。 年月日

この篁の求婚書に着目すると、中国・六朝の影響を受けた四六駢儷体で漢籍を巧みに用いて記されており、篁の学識と文才を物語っている。この実在する篁の求婚書が、彼の生きた時代＝9世紀前半に作成されたものであることを考慮する

と、『篁物語』の第二部のテーマは、第一部に先行して成立したとしても問題ないのである。実在の人物である小野篁の求婚書は、虚構物語である『篁物語』にとってなくてはならないモチーフであった。

この求婚譚は、『篁物語』だけでなく、松野が指摘するように『うつほ物語』との関連や、中世に成立を見る『十訓抄』や『三国伝記』などの創作との関係性が想定できる。²¹『十訓抄』十の四十四には以下のように見える。

小野篁、三守の大臣に、その女を望みける文をもて、手づから渡りけるとかや。
その詞にいはく、

才非馬卿 弾琴未能

身異鳳史 吹簫猶拙

才、馬卿に非ざれば、琴を弾すること未だ能はず

身、鳳史に異なれば、蓋を吹くことし

大臣、これを見て、感じて智になしてけり。これ、歌に同じきうへ、文をみづからもて行く。ついでに加ふ。

これによって、中世社会において、篁の求婚譚がどのように伝承されていたか知ることができる。求婚書のほか、『本朝文粹』には、篁の作品としてほかに三点が収録されている。

- ・書序 令義解序（巻八、197）
- ・詩序三 慈恩院初会詩序（巻十、275）
- ・詩序四 早春侍宴翫鶯花詩序（巻十一、341）

である。これらは、『本朝文粹』に収録されるなかでも格調高い漢文で、公の場で披露されたものである。そこには、後世言い伝えられる篁の異能や冥界との関係性はうかがうことはできない。そこで、次に伝承としての篁を見ていきたい。

三 伝承として生きる篁

篁の伝承を最初に収録したのは、大江匡房の談話を藤原実兼が記録した説話集『江談抄』²²である。この説話集は、長治年間から嘉承年間（1104～1107）にかけて成立したと考えられる。紀伝道を家学とする学者の家柄に生を受けた大江匡房は、後三条天皇、白河天皇、堀川天皇の三代にわたって侍読を務め、儀式書である『江家次第』など残した人物である。²³『江談抄』の内容は、伝聞によるためか、話題は広く雑多なものが少なくないが、篁に関するものは、【表】のとおりである。

これを見ると、篁伝承は大きく二つに分類できる。一つは、篁の異能と冥界との関係をうかがわせるものである。

【表】『江談抄』にみえる小野篁

巻	話	場所	時	登場人物			備考
1	3	内宴のはじめの事	嵯峨天皇のとき (弘仁4年)	小野篁	三善清行		
2	20	助教広人、諸道を兼学し、諸舞を習ひ、工巧に長ずる事		弘仁皇帝	高村		弘仁皇帝とは嵯峨天皇のこと
3	38	野篁ならびに高藤卿、百鬼夜行に遇う事	朱雀門前	高藤中納言中将 (寛平9-昌泰2)	小野篁	藤原高藤	百鬼夜行
3	39	野篁は閻魔庁の第二の冥官たる事	陽明門前		小野篁	藤原高藤 藤原冬嗣	冥界
3	42	嵯峨天皇の御時落書多々なる事		嵯峨天皇の時	小野篁	嵯峨天皇	落書
4	5	閣を閉じてただ聞く朝暮の鼓	河陽宮行幸		小野篁	嵯峨天皇	白楽天の句
4	18	野に着いては展べく紅錦繡		承和の遣唐使以降	小野篁	白楽天	望海楼
4	24	暗に野人と作す天の与へし性			小野篁	惟良春道	
4	84	万里に東に来ること何れの再日ぞ				沈道古 (85)	唱和

(三八) 野篁ならびに高藤卿、百鬼夜行に遇ふ事

また云はく、「野篁ならびに高藤卿、中納言中将の時、朱雀門の前において百鬼夜行に遇へる時、高藤車より下る。夜行の鬼神ら高藤を見て、「尊勝陀羅尼」と称へりと云々。高藤知らざるも、その衣の中乳母の尊勝陀羅尼を籠めたる故なりと云々。野篁、その時、高藤の奉為に芳意を致し、鬼神に遇はしむ」と云々。

この百鬼夜行に遭遇したが難を逃れる話は、古い部類に入る。『今昔物語』には、安倍晴明と師匠である賀茂忠行が京中で百鬼夜行に会うものの、清明の聡明さによってやり過ごすことができ、忠行はその資質を見抜いたという話がある。篁は、同行する藤原高藤が、厄除けの経文である「尊勝陀羅尼」を身に着けていることを知って、百鬼夜行と会うようにしたという異能を物語る話となっている。なお、高藤(838～900)と篁の活動時期に齟齬がある²⁴ため、百鬼夜行との遭遇譚は事実としても難しい。続く話は、高藤の蘇生と冥界を往来する篁の姿が語られる。

(三九) 野篁は閻魔庁の第二の冥官為る事

その後五、六ヶ日を経て、篁、結政に参る剋限に、陽明門の前において、高藤卿のために車の簾・靴などを切らると云々。時に、篁は左中弁なり。すなはち篁、高藤の父の冬嗣の亭に参りて、子細を申さしむる間、高藤にはかにもつて頓滅すと云々。篁、すなはち高藤の手をもって引き発す。よりて蘇生

す。高藤庭に下りて篁を拝して云はく、「覚えずしてにはかに閻魔庁に到る。この弁、第二の冥官に坐せらと云々。よりて拝するなり」と云々。

この話が、冥界と往来する篁の像の嚆矢であり、この虚像が六道珍皇寺などの地獄往来伝承として根付いていくことになる。冥界の概念は、「往生記」などが執筆される平安後期の浄土教の影響下で形成されたことが考えられる。

もう一つは、篁の文才・学識にかかわる説話である。

(一八) 野に着いては展べ鋪く紅錦繡 天に当たつては遊織す碧羅綾
蟄戸ちっこを洗ひ開きて雪雨ひるがえを翻す 蟠竜ばんりゅうを投げ出して水氷みづを破る

内宴 春生 野相

古老相伝ふ、「昔、わが朝、唐に白楽天有りて、文に巧みなるを伝へ聞く。楽天、また日本に小野篁 有りて詩を能くするを聞く。常嗣の来唐の日を待ち依る。いはゆる望海楼は篁のために作るところなり。篁、副使として入唐の時、大使と論有りて進発せず。会昌五年の冬、楽天亡して、後年にまた文集渡来す。中に篁の作るところと相同じ句三つなり。「野草芳菲たり紅錦の地、遊糸繚乱たり碧羅の天」、「野の蕨ば人手を拳る、江の麓は錐囊を脱す」、「元和小臣白楽天、舞を観歌を聞きて楽の意を知る」等の句なり。天下、篁を珍重す」といへり。

白楽天(白居易)(772～846)は、唐代中期の詩人で、彼の詩は、中国だけでなく、日本や朝鮮半島でも人々に愛された。838(承和5年)には、藤原岳守が唐から詩集を入手し、仁明天皇に献上したところ、従五位上の叙位に預かったことが知られる。実際には、承和の遣唐使として入唐し、844(会昌4・承和11年)に、帰国した留学僧・惠萼が『白氏文集』を将来している。その後、多くの人に愛される「長恨歌」「琵琶行」などは、この『白氏文集』に収録されていた。

白楽天は、日本に小野篁という詩人がいることを聞き及び、承和の遣唐使として来航するはずであった篁との会合を心待ちにしていたというのである。この譚は、篁の文才・学識が海を越えて知れ渡っていたことを端的に物語る説話である。

このように、院政期の『江談抄』に見える虚構としての篁像は、冥界との往来譚と突出した文才・学識の持ち主である譚に二分して形成されていたことがわかる。『篁物語』のもう一つのテーマである、亡き妹との交信は、前者の篁像を受けけるものである可能性が高い。とすると、『篁物語』の成立は、11世紀後半から12世紀後半とする共同研究の成果は動かさにくいものになるろう。

おわりに

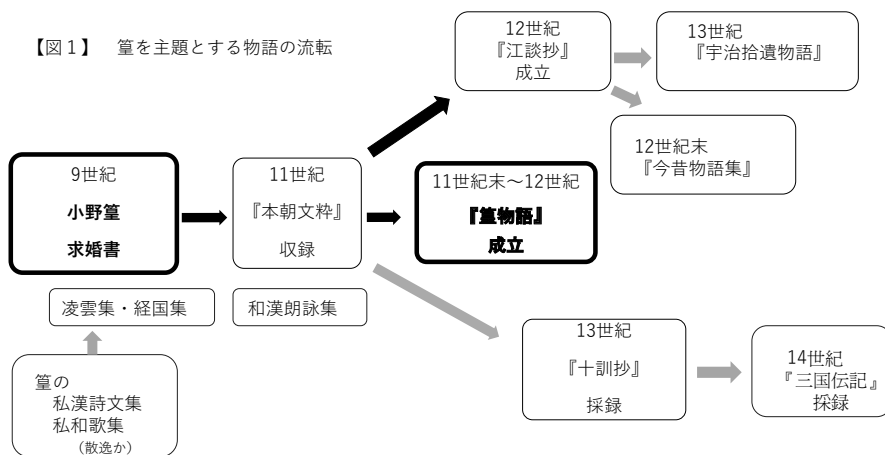
以上述べてきたことをまとめると、次のようになろう。

平安初期—9世紀—に実在の人物としての篁は、漢詩文に優れ、この「文章経国」の風潮を象徴する「良吏」官僚の一人であった。二人の東宮の学士を命ぜられたのは、当代きっての学識が社会的にも評価されていたことを端的に物語る。さらに、この篁が右大臣に提出した求婚書が、『篁物語』を成立させる大きな要因になったことは否めないであろう。これとは別に、平安後期—特に11世紀—以降の稲荷信仰の興隆を背景とする稲荷詣での場面や、浄土教の盛行を背景とする冥界とこの世を往来する異能者であるとする虚構の篁像が『篁物語』に付加されたと考えられる。

以上から、『篁物語』の核となる第一部の異母妹との悲恋、第二部の右大臣への求婚書とその娘との婚姻に、平安後期に成立したとされる様々な文学作品からの影響を受けて、院政期から鎌倉初期にかけて現在見ることができる『篁物語』が形成されたと考えられるのである。

『篁物語』が二部構成をとっていることは既に指摘されており、その構成や成立について文学からは膨大な研究の蓄積がある。それを尊重しつつも、歴史学からの観点で、『篁物語』の成立背景や篁に関する伝承の関係を整理すると、以下のような相関が想定できるのではないだろうか【図1】。

この『篁物語』を、鎌倉後期に京都西山・往生院に住持した一人の僧が、歌物語として筆写した。その僧の名前は、玄観房承空。鎌倉御家人であった宇都宮頼綱（実信房蓮生）を祖父に持つ、浄土宗西山派の僧侶である。彼が『小野篁集』を、だれから借用した歌書で、いつ書写したのか、確かな記録は残らない。しかし、彼が筆写した膨大な歌書は、「西山本」の一部「承空本」として伝来している。「西山本」の筆写された時期は、ほぼ永仁五（1297）年から正安元（1299）年ご



ろである。²⁶この点を踏まえれば、これ以前に『篁物語』が確立していたことは動かさないのである。

九年近くにわたる共同研究の成果の一つとしては、極めて貧しいものであるが、筆者に与えられた三つの課題のうち、(1) 小野篁の実像やその生きた時代背景、また (2) 『篁物語』が成立した時代背景についての歴史学からの考察としては、とりあえず責務を果たしたとして海容いただければ幸いである。

注)

- 1 出典は以下のとおり。A：『国士館人文学』7号（2017年3月）、B：『国士館人文学』8号（2018年3月）、C：『国士館人文学』9号（2019年3月）、D：『国士館人文学』10号（2020年3月）、E：『国士館人文学』11号（2021年3月）、F：『国士館人文学』12号（2022年3月）、G：『国士館人文学』13号（2023年3月）、H：『歴史評論』841号（2020年5月）、I：伏見稲荷大社編『朱』65号（2022年3月）。
- 2 松野彩「『篁物語』成立年代再考：「角筆」を手がかりとして」（『国士館人文学』7号、2017年）。
- 3 新編日本古典文学全集『日本漢詩集』（小学館、2002年）を参照した。『群書類従』文筆部巻125・経国集に所収。
- 4 『文徳実録』仁寿二年十二月癸未条。『日本後紀』弘仁六年正月壬午条では、父岑守が陸奥守に任命されている。
- 5 『続日本後紀』承和五年（838）十二月己亥条。
- 6 養老職員令大学寮条。
- 7 桑田訓也「神亀五年・天平二年の「学制改革」に関する基礎的考察」（『史林』92 - 3号、2009年）、川尻秋生「弘仁格式からみた大学寮」（『ヒストリア』238号、2013年）ほか。
- 8 古藤真平「文章得業生試の成立」（『史林』74 - 2、1991年）が詳細に述べている。これによれば、篁は文章生試を経て中央官吏として活躍した人物として早い例である。
- 9 『恒貞親王伝』（『続群書類従』）に出家したことは見える。拙稿「平安時代における親王の身分と身体—廃太子・親王宣下をめぐって—」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度』所収、同成社、2021年）を参照。
- 10 拙稿A参照。
- 11 『公卿補任』弘仁十三年条に見える岑守の官歴のなかで注目すべきは、以下のとおりである。大同4年4月に春宮亮（春宮は神野親王、のちの嵯峨天皇）。弘仁12年正月に皇后大夫（皇后は嵯峨皇后橘嘉智子）。また、本条の頭書によればその系譜は、「敏達天皇—春日皇子—妹子—毛人—毛野—永見—岑守」とする。嵯峨朝に成立した勅撰漢詩集である『凌雲集』には、嵯峨天皇に次いで賀陽豊年と並んで漢詩13首が採録されている。『文華秀麗集』や『経国集』にも岑守の作品が収容されている。唐風に一字姓として「野岑守」と表記した。

- 12 拙稿 A および D を参照。
- 13 著名なのは、神護寺の鐘銘である。この銘文の序は橘広相、銘は菅原是善、書は敏行と伝わる。『高雄神護寺鐘銘』(京都大学附属図書館所蔵・京都大学貴重史料デジタルアーカイブ。レコード ID : RB00013926)
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013926> (2023 年 9 月 21 日閲覧)。
- 14 繁田信一『小野篁－その生涯と伝説』(教育評論社、2020 年)。小野篁の全体像に迫る本格的な成果である。
- 15 久禮旦雄「淳和天皇朝の稲荷神社」(『朱』61 号、2018 年)。加瀬直弥「文徳朝・清和朝における神階奉授の意義」(『平安時代の神社と神職』所収、吉川弘文館、2015 年、初出は 2002 年)
- 16 井上満郎『秦河勝』(吉川弘文館、2012 年)、同「伏見稲荷大社創建についての再検討」(『京都埋蔵文化財論集』8 号、2021 年)、加藤謙吉『秦氏とその民』(白水社、1998 年) など。
- 17 拙稿 I 参照。
- 18 五味文彦「初期の稲荷祭」(『朱』38 号、1995 年)、久米舞子「稲荷祭と平安京七条の都市民」(『史学』82 号、2013 年)、同「平安京の都市民と稲荷祭」(『朱』66 号、2023 年)。
- 19 拙稿 B および I 参照。
- 20 松野彩「『篁物語』「椽の衣」についての考察－『うつほ物語』藤英から篁へ－」(『国士館人文学』9 号、2019 年)。
- 21 後藤昭雄『本朝文粹抄 五』(勉誠出版、2018 年)118~130 頁。拙稿 H も参照。『十訓抄』は、新編古典文学全集(小学館、1997 年)による。『三国伝記』は(「中世の文学」『三国伝記(上)・(下)』池上海一校注、三弥井書店、1976-1987 年)による。
- 22 『江談抄』は、『江談抄 中外抄 富家語』(新古典文学大系、岩波書店、1997 年)による。
- 23 川口久雄『人物叢書 大江匡房』(吉川弘文館、1989 年)、磯水絵『大江匡房－碩学の文人官僚』(勉誠出版、2010 年) など。
- 24 高藤が中納言であったのは、『公卿補任』によれば、897(寛平 9)～昌泰 2(899)年で、既に篁は鬼籍に入っている。
- 25 菊田茂男「篁物語の構造についての試論」(東北大学文学部『研究年報』14 号、1963 年)、遠藤嘉基校注「篁物語平中物語・解説」(岩波古典文学全集『篁物語・平中物語・濱松中納言物語』所収、岩波書店、1964 年)、平野由紀子『小野篁集全釈』(1988 年、風間書房)、平林文雄『増補改訂小野篁集・篁物語の研究』(和泉書房、2001 年)、安部清哉「贈答歌と会話と段階構成からみた『篁物語』という“つくり歌物語”の創出」(『学習院大学文学部研究年報』第 65 輯、2018 年) など。文学からの詳細な研究史については、平林著書にまとめられているので、参照されたい。
- 26 拙稿 C・E・F・G 参照。

付記) 小稿は、公益財団法人三菱財団・人文科学助成(2022 年度)による成果の一部である。